

京都御所の障壁画と絵師



ぎょうにんけんとちず
狩野永岳が画いた御常御殿上段の間「堯任賢図治図」



岸岱が画いた諸大夫の間「虎」

現在の京都御所は安政2年(1855)11月に完成したもので、前年4月の焼失後2年とかからない急ピッチの再建でした。このとき焼失を免れた障壁画があり、またその後御殿の新造や取壊しが若干あります。

ですが、現在ある障壁画を数えると、襖が864面、戸襖が336面、小襖が106面、張付(壁に直接、障壁画を貼り付けたもの)が231面、杉戸が218面と、御殿に常時設置される屏風48面や衝立14面で、合計すると1817面となります(ただし原品保存のため模写したものを除く)。

画題では、御学問所・御常御殿の上中下段の間など、表向きの格式の高い部屋では中国的な勸戒画・吉祥画が画かれるという傾向がありますが、そのほか、日本的な名所絵・四季絵などの景物画も広範に画かれています。

安政の御造営に関わった絵師は100名近くおり、土佐派・狩野派などの伝統的に御所の絵を画いてきた御用絵師の流派に限らず、多様な絵師が採用されていて、これらの障壁画は当時の京都画壇のタイムカプセルとも言われています。

現存の障壁画の総面積を試みに計算してみると、約3300㎡あり、その中で面積が広い絵師は、まず狩野永岳が約186㎡

です。永岳は小御所・御学問所・御常御殿の各上段の間(天皇の御座がある)の襖絵を担当しており、その位置付けがうかがわれます。そのほか、土佐光文が約155㎡、土佐光清が約148㎡、原在照^{がんたい}が約136㎡、岸岱が約130㎡、…という順になりました。6人制バレーボールのコート1面(9m×18m)が約162㎡となっているので、永岳はそれ以上の大きさを画いたことになります。



円山応挙が寛政内裏造営の際に画いた小襖「水に鮎」
皇后宮常御殿御小座敷上の間 (現在収蔵庫に保管)



しゅもく

平成24年に葺替えが終わった撞木廊下(背後に見えるのは小御所の屋根)

撞木廊下は、鐘等を鳴らすT字型の撞木と平面形が似ていることからそう称されます。



桧皮葺の模型。日華門近くの回廊に置いてあります。

日本には古くから伝わる植物性の屋

根葺工法として、^{ひわだぶき こけらぶき かやぶき}桧皮葺、柿葺、茅葺などがありますが、その中で桧皮葺は最も格式の高い技法であり、京都御所御殿の他にも神社など多くの有形文化財で見ることができます。

桧皮葺は、樹齢70年以上の桧の立ち木から荒皮(最初の樹皮)を剥いたあと、8年程度経過してできる黒皮を再び剥いて使います。それを長さ75cm、幅先端(軒先方向)15cm、末端10.5cm、厚さ1.5mm程度の笏のような形に成形し、1.2cmずつずらしながら重ね、竹釘で固定していきます。

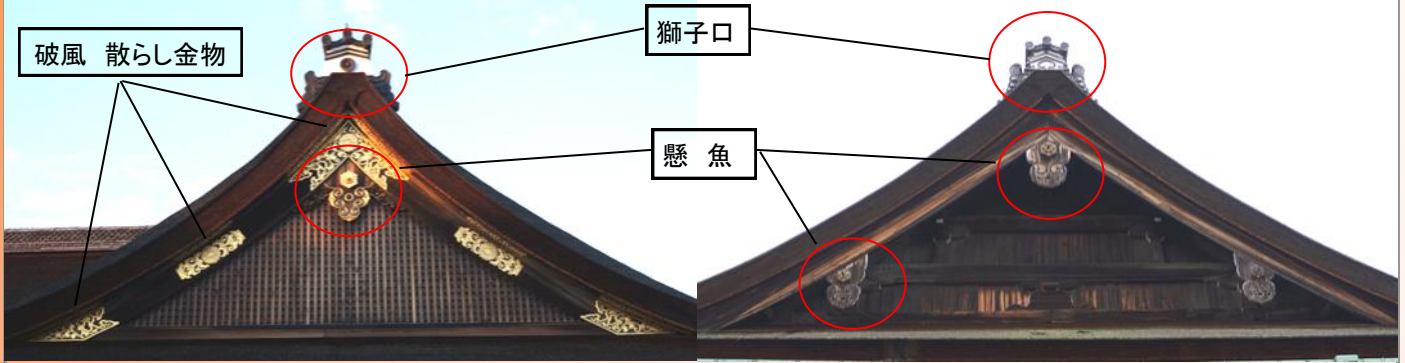
京都御所各御殿の屋根は、桧皮葺と柿葺、銅板葺、そして瓦葺でできています。現在行っている桧皮葺・柿葺の屋根葺替工事は、平成元年から始まりましたが、全体面積で約15,900㎡あり、今年度から来年度に行う対屋廊下約850㎡を終

たいのや

因みに安政2年(1855)の京都御所造営後、桧皮葺屋根は明治18年(1885)から約10年間かけて最初の葺替えが行われ、次いで2回目は概ね大正初期から昭和初期にかけて、3回目は昭和32年～48年に行われ、今回は4回目の葺替えとなります。

御殿の屋根を飾る装飾類

観 殿



京都御所の御殿は様々な装飾が施されていますが、今回は屋根周りに注目してみます。

まず懸魚は屋根の破風に取り付けた妻飾りです。魚を懸けると書くように、火除けの意味があると言われているものです。京都御所の懸魚は、紫宸殿・清涼殿などには猪の目を模したと言われる猪の目懸魚が使用されています。かぶら懸魚は音が鳴る矢の鎗矢から由来していると言われるもので、新御車寄・諸大夫の間などで使用されています。御常御殿・小御所・御学問所などは三花懸魚で、三方にデザインが配置されたものです。



猪の目懸魚(紫宸殿)

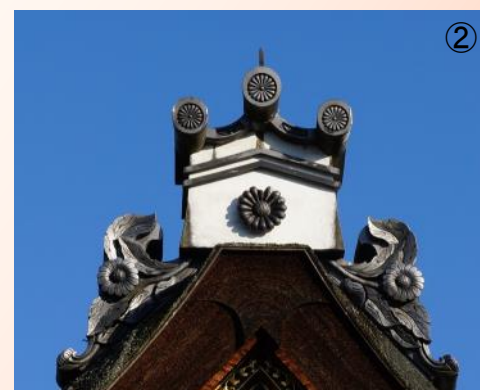


かぶら懸魚(新御車寄)



三花懸魚(御学問所)

獅子口(下記写真)は棟の端に置く瓦で、棟瓦と共に桧皮葺きや柿葺きなどの屋根の重しとして使われてきました。紫宸殿・清涼殿・春興殿などは①の一般的なもので、それ以外の御殿では②のように中央に菊の御紋が入ったものが使われています。その他、散らし金物と言って、破風には菊の御紋などを使った金物の装飾があります。



散らし金物

屋根を飾るこれらの意匠については、紫宸殿・清涼殿などの平安様式を復元して建てられた御殿には、菊の御紋の意匠やそれを使った金色の金物が使われていないという特徴が見られます。

— 御 所 ・ 離 宮 —

天井



化粧屋根裏天井(桂離宮:賞花亭)
しょうかてい



竿縁天井(京都御所:非蔵人廊下)
ひくろうど



建物には、室内空間と屋根を支える骨組(小屋組)を仕切るため、天井が設けられています。ここでは、さまざまな工夫が施されている御所や離宮の天井について紹介します。

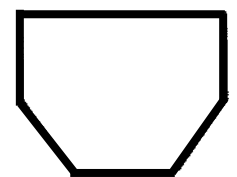
天井面が平らに張られた天井を総称して平天井といいます。そのほかに天井面が斜めになっている勾配天井、天井の断面が舟底を逆さにしたような舟底天井があります。また、屋根裏を意匠として、梁などの木材をそのまま見せている天井、もしくは勾配状に天井を張り、屋根裏のように見せている天井を、化粧屋根裏天井(写真:上段左)といいます。また、天井板を載せる材(縁)によって竿縁天井(写真:上段右)、平縁天井、猿頬天井(写真:下段)などの言い方があります。竿縁天井は、正方形ないし縦長の方形の材を等間隔にわたして、天井板を張るものです。竿縁の材が平たい(断面の形状が横長の方形)ものを平縁天井、竿縁材が面取りされて、断面が四角ではなく猿の頬のような形の縁材が用いられるものを猿頬天井といいます。京都御所では、臣下が使用する廊下に竿縁天井が用いられることが多く、猿頬天井は、御茶室、縁座敷などに用いられます。格式を重んじる京都御所では、場所により用いられる天井に違いがあるということをまず詳しく紹介します。



猿頬天井(京都御所:聴雪(上の間))
ちようせつ



猿頬(拡大)



猿頬(断面図)

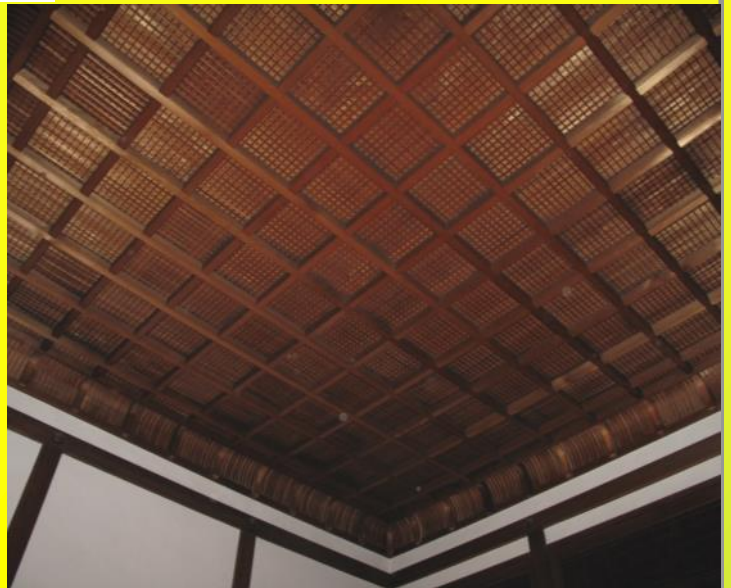


格天井(京都御所:御常御殿(一の間))

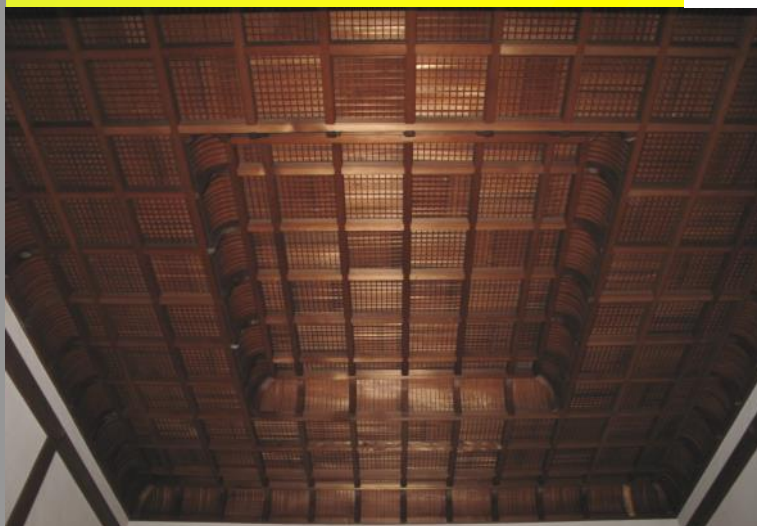


ぎよしん ごうてんじょう
御常御殿の御寝の間や一の間の天井は、格天井が用いられています(写真:上段)。格天井とは、
ごうぶち
格縁という角材を縦横(格子状)に組み、そこに天井板を張るもので、天皇御使用の奥向きの部屋に用いられた格式の高い天井です。この他、天皇と対面する者が使用する御学問所の中段・下段の間や小御所の下段の間などでも用いられています。

おりあげこぐみごうてんじょう
御常御殿と小御所の中段の間は、折上小組格天井が用いられています(写真:中段)。この天井は、天井の外周が
おりあげてんじょう
壁から湾曲して一段高くなっている「折上天井」の天井板面・格縁間に、さらに小型の格子を細かく組むものをいいます。臣下に入る部屋でも先述の格天井より格式が高く、また
さんだいでん
御学問所、御三間、参内殿など諸儀式の折に天皇の御座所となる各上段の間に用いられています。また、
けんじ
剣璽を奉安した「剣璽の間(御常御殿)」や大正天皇の即位式で御鏡を奉安するため大正4年(1915)に建てられた春興殿の内々陣にも用いられています。



折上小組格天井(京都御所:御常御殿(中段の間))



二重折上小組格天井(京都御所:御常御殿(上段の間))

にじゅうおりあげこぐみ
御常御殿と小御所の各上段の間は、二重折上小組
ごうてんじょう
格天井が用いられています(写真:下段)。この天井は、折上小組格天井の中央部分がさらに一段高くなっているものをいいます。天皇が正式に対面をおこなう場合に御座所として使用される部屋に用いられています。

主な部屋の天井一覧表

	上段の間	中段の間	下段の間
御常御殿	二重折上小組格天井	折上小組格天井	化粧屋根裏天井
小御所	二重折上小組格天井	折上小組格天井	格天井
御学問所	折上小組格天井	格天井	格天井
皇后宮御常御殿	折上小組格天井	格天井	猿頬天井



化粧屋根裏天井(京都御所:紫宸殿)



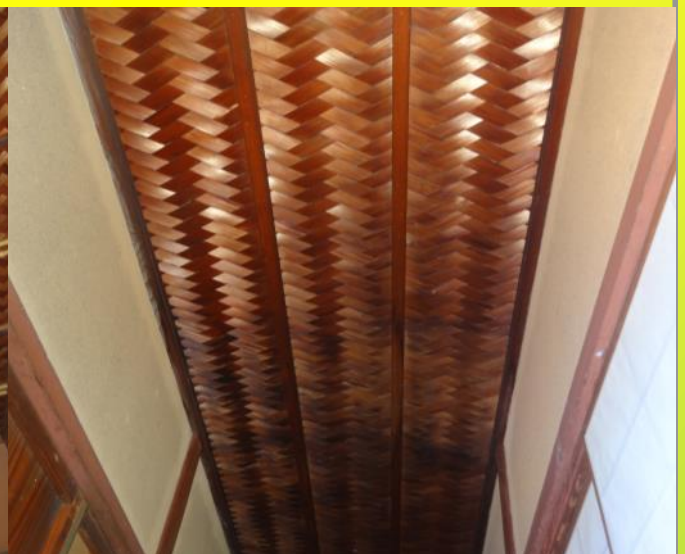
また、元々平安宮内裏に建てられていた紫宸殿、清涼殿や飛香舎には化粧屋根裏天井が用いられています(写真:左)。これらの建物は、天明8年(1788)の火災で焼失したため寛政度御造営時(1790年)に建物が再建される際、故実家などの考証を基に平安宮内裏の様式に復古されましたが、再び嘉永7年(1854)に焼失してしまいました。安政度御造営(1855年)も同様の形式で再建されたのが、現在の建物です。梁が非常に太いこともあり重厚な感じがあります。

以上のように、京都御所にある御殿の天井の様式は、復古により平安宮内裏の宮殿建築を用いた様式と、江戸時代までに発達した様式が混在しています。いろいろな時代の様式が見られる貴重な建物群といえます。



網代天井(仙洞御所:醒花亭(書院))

せいかてい



網代天井(修学院離宮:隣雲亭(廊下))

りんうんてい



これまで見てきた天井の他に、仙洞御所、桂離宮や修学院離宮には網代天井と言うものがあります。網代天井は、主に茶室で使われ、葦、竹、杉・檜などの薄板を斜めもしくは縦横に編んだ網代を用いたものです。仙洞御所の醒花亭(葉其の三で紹介)、桂離宮の笑意軒や修学院離宮の隣雲亭(葉其の六で紹介)で用いられています。網代を乗せる縁に竹が使用されたり、その縁の配置が場所により本数に違いがあったりするなど、細かい変化をつけた意匠となっています。



網代天井(桂離宮:笑意軒(一の間))

しょういけん



しとみど
蔀戸



蔀戸は、平安時代に主に内裏や貴族の邸宅で、日光や風雨を遮るために使われた建具です。

京都御所内の蔀戸は、中心に板ごふんを入れ胡粉を上塗りし、外側は縦横に木を組んだ格子で挟み(内側は横棧のみ)、黒漆を塗ってあります。

通常蔀戸は長押しなげしに蝶番ちょうつがいで固定され、閉まっていますが開ける時は撞木しゅもく(写真:①)と呼ばれるT字型の棒

で、内側(外側)に跳ね上げて、垂木から吊されているL字形の吊り金物に引っかけて固定します。この形式の蔀戸は、紫宸殿・清涼殿などで見ることができます。

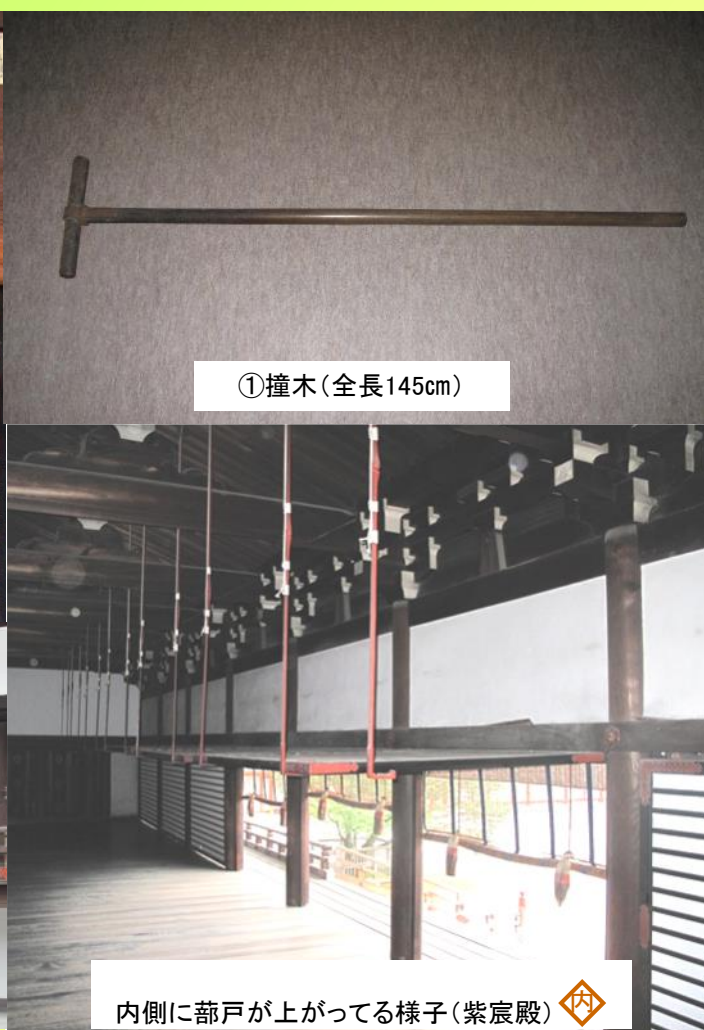
紫宸殿の蔀戸1枚の大きさは、幅270cm 高さ230cmで、重さは未計測ですが、開閉する際は大人4人以上の力が必要になります。

蔀戸の種類には他にも、半蔀、立蔀、折り上げ蔀といったものがあります。



胡粉で上塗りした板の上に、黒漆の格子

蔀戸が閉まっている状態(紫宸殿北側) 



内側に蔀戸が上がってる様子(紫宸殿) 

①撞木(全長145cm)



②半蔀(小御所) 観 殿



半蔀の下半分を取り付けた状態

半蔀(写真:②)とは、上半分は蔀戸と同様の仕様となっておりますが、下半分は取り外しが可能な柱にはめ込み式の蔀がはめられているものを言います。京都御所では小御所や御常御殿の南側で見ることができます。



③立蔀(陣の座 東側) 殿



陣の座(南東側) 殿

立蔀(写真:③)とは、庭上などに目隠し用として設けられた、はめ込み式のものを言います。京都御所では紫宸殿東側の陣の座(近衛府の官人が陣を設けたところ)や清涼殿の南側などにあります。



④折り上げ蔀(清涼殿) 観 殿



折り上げ蔀・拡大

折り上げ蔀(写真:④)とは、上に跳ね上げる部分の中央が折り曲げられるようになっている蔀のことで、折り曲げた後に外側に跳ね上げて吊り金物で固定するという少し違った形状をしています。京都御所では清涼殿北側滝口付近で閉まった状態ですが、見ることができます。

— 御 所・離 宮 —

窓

採光、通風や眺望のためなどに設けられた窓は、御所や離宮では様々な意匠のものがあります。

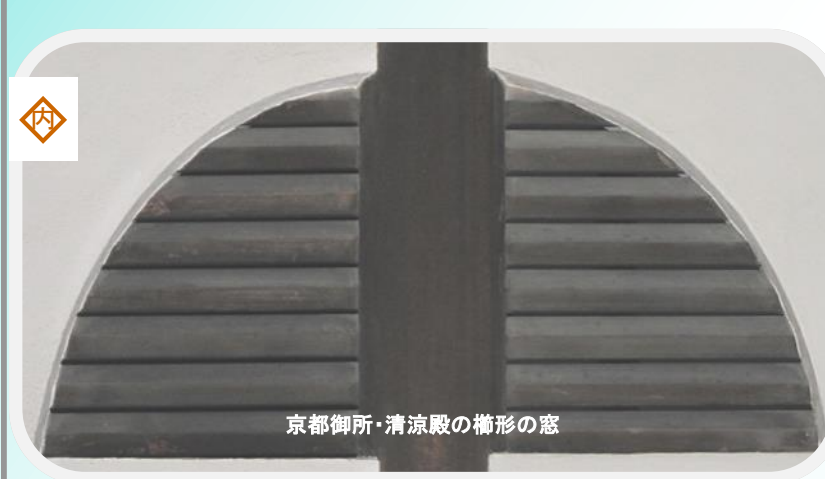


京都御所・新御車寄



新御車寄のガラス窓

京都御所の新御車寄は、大正4年(1915)の大正天皇の即位の大礼に合わせて造られた建物で、内裏の建物ではあまり見られないガラス窓があります。大正時代の板ガラスの製造技術は現在ほど進歩しておらず、少し波打っていました。逆



京都御所・清凉殿の櫛形の窓



櫛形の窓

(母屋から撮影・外部からは見えにくい位置にあります)

清凉殿殿上の間にある櫛形の窓(写真:中段)は、櫛の形をしている木製の窓です。母屋などから殿上の間を覗くことができます。(前頁左下の殿上日給の写真にも櫛形の窓は写っています)

泉殿は御常御殿の東側の御内庭内にあり、地震の際の避難所として建てられました。嘉永7年(1854)の火災で被害にあわなかった建物で、文政13年(1830)のものです。簡素な造りの建物の北側には丸窓(写真:下段)が設けてあります。



京都御所・泉殿



泉殿の丸窓(室内から撮影)



京都御所・露台(右側は紫宸殿の北廂)



京都御所・露台の連子窓

紫宸殿の北側にある
るだい
露台には連子窓があり
れんじまど
ます。連子窓とは、
れんじこ
連子子と呼ばれる材を、
縦又は横に並べて組ん
だ窓のことです。



仙洞御所・又新亭の丸窓



障子開放時

仙洞御所にある又新亭には、掛け合い組み(破れ井桁)の棧がある丸窓が設けてあります。又新亭は元々ここにあった茶
室の止々斎が嘉永の大火で焼失したため、その跡地に近衛家にあった建物を明治17年に移築したものです。京都御所の
泉殿は窓の内側の明かり障子(前頁掲載)の棧が掛け合い組みになっている霞障子ですが、又新亭は窓枠の棧が掛け合
い組みとなっています。霞障子とは、組子と呼ばれる縦や横に組む材で霞のたなびく様子を表している障子のことです。



桂離宮でも様々な窓が見られます。

おんりんどう かとうまど
園林堂には、連子窓と火灯窓(花頭窓)があります。

火灯窓は禅宗様式として伝わったとされ、上部に曲線を持つ形式
が特徴です。

園林堂は、持仏堂として仏像や八条宮家などの位牌などが安置
されたところです。



桂離宮・園林堂正面左にある連子窓



桂離宮・園林堂の火灯窓(内部より撮影)



桂離宮・新御殿にある楕形の窓

新御殿にある上段の付書院には、京都御所とは違った形の楕形の窓があります。こちらの窓縁は黒漆塗りとなっています。



連子窓

桂離宮・賞花亭

下地窓

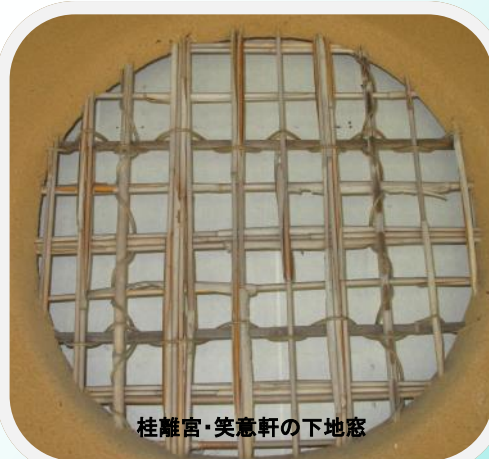
賞花亭には下地窓と連子窓があります。

下地窓とは、土壁をすべて塗らず、下地を見せたままの状態の窓です。



桂離宮・笑意軒

笑意軒の口の間の欄間には、丸く形成された円形下地窓が6つあります。



桂離宮・笑意軒の下地窓



修学院離宮・窮達亭

きゆうすいてい

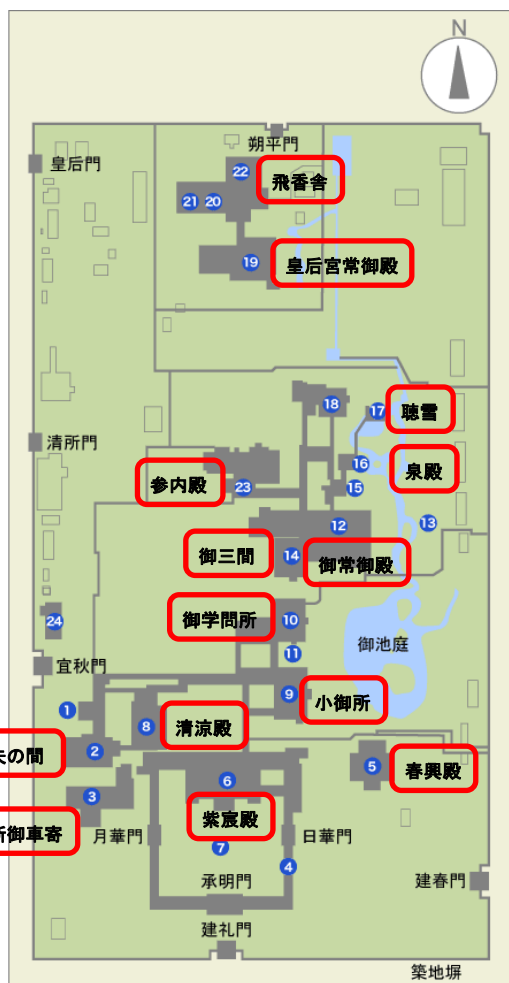
修学院離宮の上離宮にある窮達亭の北側にも下地窓があります。

この他にも様々な魅力のあるものがあります。参観される際は、何かひとつのものを追ってみるのも、新しい発見につながるかもしれません。



修学院離宮・窮達亭の下地窓

京都御所案内図



- 1 御車寄
- 2 諸大夫の間
- 3 新御車寄
- 4 回廊
- 5 春興殿
- 6 紫宸殿
- 7 南庭
- 8 清涼殿
- 9 小御所
- 10 御学問所
- 11 蹴鞠の庭
- 12 御常御殿
- 13 御内庭
- 14 御三間
- 15 迎春
- 16 御涼所
- 17 聴雪
- 18 御花御殿
- 19 皇后宮常御殿
- 20 若宮御殿
- 21 姫宮御殿
- 22 飛香舎
- 23 参内殿
- 24 参観者休所

修学院離宮案内図



- | | | | |
|-------|-------|-------|--------|
| 下離宮 | 中離宮 | 上離宮 | |
| 1 御輿寄 | 3 楽只軒 | 6 大刈込 | 10 楓橋 |
| 2 寿月観 | 4 客殿 | 7 隣雲亭 | 11 窮達亭 |
| | 5 松並木 | 8 万松塙 | 12 土橋 |
| | | 9 千歳橋 | 13 御舟着 |
| | | | 14 西浜 |

京都仙洞御所・京都大宮御所案内図



- 1 京都大宮御所御車寄
- 2 京都大宮御所御常御殿南庭
- 3 御庭口
- 4 北池の舟着
- 5 阿古瀬淵と六枚橋
- 6 紀氏遺蹟の石碑
- 7 土橋
- 8 石橋
- 9 雌滝
- 10 紅葉橋
- 11 紅葉山
- 12 蘇鉄山
- 13 雄滝
- 14 土佐橋
- 15 ハツ橋
- 16 中島
- 17 麗花亭
- 18 柿本社
- 19 洲浜
- 20 又新亭の外腰掛
- 21 又新亭

桂離宮案内図



- 1 御幸道
- 2 外腰掛
- 3 蘇鉄山
- 4 洲浜
- 5 天の橋立
- 6 石橋
- 7 松琴亭
- 8 賞花亭
- 9 園林堂
- 10 笑意軒
- 11 月波楼
- 12 古書院
- 13 月見台
- 14 中書院
- 15 新御殿
- 16 住吉の松
- 17 桂垣
- 18 穂垣

観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

＜問い合わせ先＞
〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215